此日靖國神社境内及び牛ケ淵公園内にはテントを張りて會員の溜所とし、音樂隊、大神樂等の余興あり、會員は式後此處に來り茶菓など喫しつゝ休み見るもあり、又新宿御苑、總裁妃殿下御庭園の拜觀後樂園遊就館などの觀覽をも許されけり、はる〳〵上り來りしかの婦人は如何にしつらん、鄕里に歸りて定めて面目ある事なるべしなど考へ尙愛國婦人會の此後益々隆盛に赴かんことゞも希ひつゝ歸途につきぬ。

春の日影ののどかなるに大和心にたゞへらるゝ櫻の花も笑ひ初めんとする今日しも此盛大なる會に連り、まのあたり天つ日影を拜し奉り得しかしてさ狹き袂に包むに由なく、後日御盛德の程恐び奉るよすがにもせんとかくは記しつ。

九州地方の狀況

（前々號のつゞき）

久保やま子

猶私の住居より十里貳拾里と遠ざかり肥后境の方に參りますと、殊更風俗も異なり衣服の仕立方から結髮の有樣、夫れは〳〵諄朴な者で穴居時代が追想致されます、併し衞生とか淸潔とか申精神は殆んと皆無かと懷れます。目良山や椎葉山に參りますと、殆んと他鄕人には男女の區別に苦む位、其一例は昔時と雖も此邊の婦人は眉もすらず、齒もそめず、蓬の樣な頭髮を搖り被て居りますから、翁媼に至りては更に區別がないのです、衣服も隨て唯寒暑を防ぐに足るので、裏表は綴り合せし迄、袖とても筒袖でもなければ通俗の長袖でもなし、申さば手を通すに足る迄のもの、荒々しき麻布にて製して着用して居ります、背後は彼の有名の五

家莊と幾多の丘陵否山嶽を隔てゝ連なりて居るのです、清潔と申精神がなければ不潔が更に心鏡に映じないのも其はずですが、玄關とも申べき入口には各戸塵埃が堆積して床に垂んとして居り、三冬冱寒の中と雖も蚊帳の三方を取り除きて一方のみ鴨居に釣られてあるのです、かゝる有樣なれば入浴もいと稀に全身松の外皮の如く唯顏面のみ少しく人類の皮膚を露出してあるのです、然るに八十八夜頃になりますと多くの男女の足のうらが清潔になるのです、嗚呼其理由は到底御理解になりますまい、それは製茶の爲です（蒸して茶を踏むからです）まあ一、如斯有樣ですから餘は御了察を願ひたいのです、斯く避地になりますと敎育なんどゝ申事は夢想だも及ばぬ位、皇恩は隈なくて至る所の山間部落にも小學の設けはあれど、唯文字を敎ゆるに止まりて居ります、先づ二十年ほど前迄は「無山中曆日」と申樣な古雅な美風も幾分存在して居たそふですが、其後は稀に他鄕人が入込みて惡風を傳へ、又は片なりの小學敎員や兵役滿期の壯年等が擧動を誤視し、狡猾を以て怜悧となし利己主義を以て文明と懷ひ、相競ふて外形のみを繕ふ樣になり、しかも唯己れ一身の爲にするのみ故に塵埃堆積したる家屋內に主人壹人白縮緬の帶を結ぶと云ふ有樣、如斯年々歲々美風を去て行くのみなるは、實に殘念の極です、如斯相成ますと一家計りに止りません、引て一部落一村一郡に及ぼすので、今日猶日向は北海道に比せらるゝのも決して酷評ではありません。土地は廣く人は稀く御座いますから、個人が働けば財政の發展は期して待つべきですが、其個人が墮落した爲め一家一村引て一縣に

及すのです、山産農産海産物等も皆他縣人に利益は吸收せられて終るのです、其原因は利己主義の人のみ多くあるため決して共同とか團体とか申風に相提携して、相扶援して事業の振興を計る事なく、相互に防害して自滅に終るのです、かゝる弊風を治療するのは何で御座いましよう、即教育ですが、其教育の中にも分けて申せば德育だろふと存ますのに、山間避地になりますと其德育を施すべき操行の修た教員がまづ皆無と申ても宜いほどで、目新らしき体操や唱歌で純朴な民を瞞し理科や博物で學者顔する者の多きに困るのです。或る學校長が生徒の父兄に詰問されて、御眞影に言よせて逐ひ歸したと申狂言もあると申事です、實に恐縮の至りです、未開の地に輕浮な教へを施した結果は、氣早な若者は鋤鍬を投じて唐詩を高吟し、紙袋を焙りて空氣の存在を喃々し、以て老爺を驚嘆せしめ、以て己れの爲すべき業を怠る楷梯となすのです、故に細民は入學を厭ひ村役場の督促を免れず、聊か資産ある者は遠く他府縣に遊學せしむ、然り中學殊に其初年級時代は留學好結果を得るは稀にして、所謂世間知らずの鄕里の父母兄姉を欺き、所謂「ハイカラ」となり、素行修らず、歸鄕の後反て淫靡の種播きを爲す者多く、會學成り行ひ修る者は鄕里の到底爲すべからざるを悟り歸り來らず、愛鄕の念深く祖鄕の廢頽を默視するに忍びず、歸鄕事を爲さんと欲すれば彼の「ハイカラ」生に反て指彈せられ、失敗に終る、又到底破邪正を遂行する程の人傑は得て期すべきで御座いません。さらば避地は未來永刼斯くして終るで有ましようか、願くは大道德家大慈善家大

教育家が出現し、大慈大悲心をもて疎野極まる風俗を土地と共に開墾し、もて文明の恩澤に漏るゝなく、愈々皇恩の有難さを山間幽谷の部落寒村に迄も浴させたいと夙夜熱望に堪へぬので御座います、思ふ儘を長く申しましてさぞ御聴き苦るしう御座いましたろふ左様なら。

流水日記

小林雨峰

古き日記をくりひろげたる折、ゆくりなくも東奥の紀行ありたれば、反古袋に埋れ去るも雛肋の惜すてがたく、しるして、予が曾遊のあとを追はん料としつ見ん人其の心してよ

春はくれて都は、既に、大久保の躑躅花咲くと云ふなる頃、われはまた東奥の旅客に上りぬ、遊心勃々として、向はぬにずでに心は遠く東奥の空に向へり

愁を掃ふには旅より外にものゝ具なしと嘗てより思へるわれは、今尚ほ此が爲めに身を東西に任すとのいかにこよなき樂みのこもれる、況んや再度の閑遊のそれなるは更らにうれしく、白鷗浩蕩の趣ものかは、行く春の落花を趁ひ、流れゆく水にまかせて奔りゆきしは夢見る心地すと云ふも愚よ、

途すがら目に映つりし沿道の景色は、霞浦の春靄、曉より次第にたち籠めたるが、なかに人家ちらほらと見ゆるをかいまみて、愈々北に入れば、水戸こそまづなつかしく目に入る、仙波湖の漣波皺みて、芳草若やかに生ひ出て、東風に靡き、對岸の樹木蒼朧とし立ちならぶ、城址の牙城、今に昔の俤を宿し、義烈兩公盛時もいと思ひやらる、